

TOP MUSEUM

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062
TEL 03-3280-0099 FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

2019/09/30

イメージの洞窟 意識の源を探る

from the cave

2019年10月1日（火）－ 11月24日（日）



フィオナ・タン

《近い将来からのたより》 2003年

ビデオ・プロジェクション(9分30秒) 作家蔵

©Fiona Tan, courtesy of Wako Works of Art

展覧会趣旨

わたしたちは普段、主に視覚によって情報を得ていると言われていています。その視覚情報を元に、個々人の“イメージ”を作り出し、さまざまに重ね合わせながら、ものごとを考えていきます。わたしたちそれぞれが認識すること、そのベースには複雑に入り組んでからみ合ったイメージが存在しています。

本展覧会は、古代の洞窟壁画に始まり現在に至るまで、さまざまな作品表現の源泉となっている「洞窟」をモチーフとして写真と映像の作品から、イメージや認識の作られ方を再考しようとするものです。

文化でつながる、未来につながる。

TokyoTokyo
FESTIVAL

出品作家

北野謙／志賀理江子／フィオナ・タン／オサム・ジェームス・中川／ゲルハルト・リヒター
(特別展示) ジョン・ハーシェル

本展のみどころ

1. 「洞窟」から見えるものとは？

現実の洞窟は真っ暗でなにも見えません。しかし洞窟というモチーフは、わたしたちの意識の源を探るうえで、思いがけないヒントを与えてくれます。たとえば、哲学者プラトンは、洞窟を比喻として、イメージの認識に潜む「虚像と実在」という根源的問題を示唆しています。また、宗教学者ミルチャ・エリアーデは、自己を根源的に体験しなおし、外界と関わりなおす準備をするための場として、洞窟があると指摘しました。洞窟はわたしたちの感覚を研ぎ澄してくれる場所といえるでしょう。

2. 展示室が洞窟に！「闇」と「光」が生み出す写真表現の豊かさ

写真は「闇」と「光」の対極的な存在が両立して、はじめて像を得ることができます。

本展は、撮影技法から展示手法まで、現代写真における多様性を紹介します。まず、志賀理江子による写真作品は、直接的に「私は誰なのか」と問いかけます。オサム・ジェームス・中川による沖縄のガマ（洞窟）を撮影した写真のインスタレーションでは、暗闇から生まれるさまざまなイメージと出会うでしょう。北野謙による初公開・新作の乳児のフォトグラムは、わたしたちに身体や存在そのものが洞窟のような存在であることを想起させます。ジョン・ハーシェルが描いた「洞窟」のドローイングは写真表現の源へと遡り、フィオナ・タンの映像作品は洞窟の湾(いりえ)から始まる古いニュース動画を紡いで、未来を予言しているようです。そして現代美術の巨匠、ゲルハルト・リヒターは、わたしたちのイメージが洞窟のように複雑に構成されていることを深く認識させてくれます。

本展は、闇と光からなる「洞窟」をモチーフあるいは暗喩として、わたしたちの意識の源に揺さぶりをかける、写真・映像作品 33 点を展示します。

3. 注目！ゲルハルト・リヒター、日本初公開作品を含む 13 点を紹介

本展では、ドイツを代表する現代美術家、ゲルハルト・リヒターの作品 13 点を紹介します。

日本初公開となる《MV. 6》をはじめ、ロンドンのテート・モダンの来館者を写した写真をベースに制作された〈Museum Visit〉シリーズほか、計 13 点が一堂に会します。国内外においてリヒターの近作群をまとめてご覧いただける貴重な機会です。

4. 多彩な関連イベントを開催。五感をフル活用して。

作家の制作秘話が楽しい「アーティストトーク」、鑑賞とプリントで色を作る「色彩ワークショップ」、乳児と作家がフォトグラムで共同制作する「北野謙〈未来の他者〉プロジェクト」、音楽とともに展覧会を鑑賞できる「音と見る洞窟」など、五感をフルに使って楽しめる関連イベントを開催！

担当学芸員によるギャラリートークに「手話通訳つき」も登場！多彩に展覧会をお楽しみください。

主な出品作品

■ 北野謙 | Kitano Ken



2017年から始めた〈未来の他者〉シリーズの新作を初展示します。本作はフォトグラム*の技法を用いて、乳児の輪郭を大きな印画紙に焼き付けた作品です。数ヶ月前まで母親のおなかの中にいた人物の影を光として記録することで、向こうの世界と現実のはざまにいる絶対的の他者へ思いをめぐらせる試みです。わたしたちの身体や存在そのものが洞窟のような存在であることを想起させます。

*フォトグラム…カメラを使わず、印画紙の上に物体を直接のせてイメージを写し取る写真の制作技法

《N1》〈未来の他者〉より 2018年

発色現像方式印画（フォトグラム）作家蔵 © Ken Kitano, courtesy of MEM

■ 志賀理江子 | Shiga Lieko



〈ヒューマン・スプリング〉シリーズは、肉体と精神、自己と他者、社会秩序と現代人、人間と自然の関係性への洞察を深めながら、人類を含む地球という自然を捉えなおすという、生命の存在そのものを問う試みです。東日本大震災で壮絶な体験をした作家は、衝動をおさえられない、時空の裂け目に飛び込むような表現で、その問いに挑み続けます。

《人間の春・私は誰なのか》〈ヒューマン・スプリング〉より
2019年 発色現像方式印画 作家蔵 ©Lieko Shiga

■ フィオナ・タン | Fiona Tan



《近い将来からのたより》は、アムステルダムアイ・フィルム・ミュージアムの古い記録資料を活用したファウンド・フッテージ**作品です。洞窟の湾からはじまり、船の帆、波、滝、洪水など、水のモチーフを繰り返して提示し、流れる時間と記憶の関係を詩的なサイエンス・フィクションとして探ろうとする試みです。

**ファウンド・フッテージ

既存の映像を部分あるいは全体に用い、新しく作品を作る手法。



左) 《近い将来からのたより》2003年 ヴィデオ・プロジェクション(9分30秒) 作家蔵 ©Fiona Tan, courtesy of Wako Works of Art

右) 展示風景：オックスフォード現代美術館 イギリス 2005年

■ オサム・ジェームス・中川 | Osamu James Nakagawa



沖縄のガマ（洞窟）で、洞窟の闇を人工光と超高解像度のデジタルカメラで長時間撮影したシリーズです。特殊なプリント技法で仕上げられた作品は、鑑賞者を独特の視覚経験へと誘います。大判の和紙にプリントしたインスタレーションでは、過去の記憶を想起させるとともに、新たな写真表現を模索しています。

《#001》〈ガマ〉より 2009年 インクジェット・プリント
東京都写真美術館蔵

©Osamu James Nakagawa, courtesy of PGI

■ ゲルハルト・リヒター | Gerhard Richter



〈Museum Visit〉シリーズ（2011）は、ロンドンのテート・モダンの来館者を撮影した印画紙の上にエナメルで着色した作品群です。オーバーペインテッド・フォトグラフ***と呼ばれるこの手法において、エナメルが「境界」として写真の像と鑑賞者を隔てることで、見るものに対して「絵画と写真」「具象と抽象」「現実と仮象」の考察を促しています。

《MV. 6》〈Museum Visit〉より 2011年
写真にエナメル塗料 東京都写真美術館蔵

©Gerhard Richter, courtesy of Wako Works of Art

***オーバーペインテッド・フォトグラフ…スナップショット的な写真の上に油彩やエナメルで色彩をほどこす手法。

[特別展示] ジョン・ハーシェル | John Herschel



《海辺の断崖にある洞窟、ドーリッシュ、デヴォン》は現存するハーシェルのドローイングの中でも早い時期に制作されたものです。カメラ・ルシーダはプリズムを通して画用紙に眼前の風景を映す光学機器です。暗所から明所を眺める場合の方が像を確認しやすく、暗い洞窟から明るい海辺の風景を見渡すという本作の構図は、ハーシェルがこの特性を理解して制作したことがうかがえます。

《海辺の断崖にある洞窟、ドーリッシュ、デヴォン》1816年
カメラ・ルシーダを用いたドローイング 東京都写真美術館蔵

本作は、1839年に写真技術の発明が発表された20年以上も前に制作された、貴重な作品です。光学的な画像を写して描かれた、このドローイングには、見たままのイメージを正確に自分のものになりたいというハーシェルの願望が表れています。カメラ・ルシーダはその後ネガ・ポジ方式の原点である写真技術を発明するきっかけとなるなど、写真誕生の時代において、イメージの認識に大きな影響を与えました。

北野謙 インタビュー

内と外の世界を見せる 赤ちゃんのフォトグラム

北野謙さんは、ある集団に属する人々のポートレートを重ね焼きした〈our face〉や、長時間露光による都市写真〈溶遊する都市〉、屋上に設置したカメラのシャッターを半年間開け続ける〈光を集めるプロジェクト〉などの作品で知られます。今回、展示する作品は赤ちゃんを印画紙の上にのせて光を当てて制作したフォトグラム〈未来の他者〉。いったいどのような作品なのでしょう。

— 〈未来の他者〉を拝見して、こんな赤ちゃん写真は見たことがない、と驚きました。赤ちゃんのフォトグラム、という発想の斬新さもさることながら、得られたイメージの生々しいこと。真新しい生命の力を感じると同時に、自分もこんな感じだったのかな、と思ったりもしました。

北野■“自分のこと感”があるでしょう？写真の力の本質って、人ごとでないと感じる、内発的な共感だと思うんですよ。

— 北野さんと赤ちゃんという組み合わせで思い出すのは、2017年に埼玉県立近代美術館で展示された〈未来の他者〉です。今回展示される作品と同じタイトルですが、こちらは赤ちゃんの全身ポートレートを重ね焼きするという、北野さんの代表作〈our face〉の手法で作られています。そもそも赤ちゃんをモチーフにした作品を作ろうと思われたのはなぜでしょう。

北野■きっかけは東京都写真美術館の「日本の新進作家展 vol.10 写真の飛躍」(2011)に出品したことでした。あるレディースクリニックの院長先生が、僕の作品を見てくれて、人づてに連絡をくれたんです。赤ちゃんの作品を作ることに興味はないですか、と。でも、そのときは唐突だなと感じてしまって、返事を保留しておいたんです。

2014年頃、もう1度人づてにご連絡いただいて、じゃあ、一回会いにいきましょうとクリニックにうかがったら、病院も先生も考え方がすばらしかった。

先生はこんなことをおっしゃっていました。「医療を通じて、この世界にはいろいろな事情があって生まれてくる命があると日々感じています。北野さんの〈our face〉は、芸術でそれと同じことを表現しているのではないかと思いました。何か一緒にできませんか?」。そこまで言われたら「はい、やります」と言いますよね(笑)。実際、すごく嬉しかったですし。

それから、週のはじめに電話してアポを取り、生まれたばかりの赤ちゃんの撮影にうかがうということをしばらく続けました。クリニックに行くたびに、数時間前までお腹の中にいた命と出会い、彼らがこちらの世界にやってきたんだ、とひしひしと感じました。

— それが埼玉県立近代美術館で発表した、重ね焼きの〈未来の他者〉になったんですね。今回、フォトグラムの〈未来の他者〉へと発展したきっかけはどのようなものだったのでしょうか。

北野■重ね焼きの〈未来の他者〉のプリントを大きく引き伸ばしたかったので、東京造形大の広い暗室を借りました。現像液の中で印画紙の上に赤ちゃんのイメージが浮かび上がってくるのを見て、手伝ってくれた学生が「羊水の中で赤ちゃんが気持ちよさそうに泳いでいるみたいですね」と言ったんです。それを聞いて「ということは、印画紙の上に赤ちゃんはのるんだ。なんでフォトグラムにできなかったんだろう」と思ったんです。

— フォトグラムですから、印画紙の上に赤ちゃんをつれてきて露光させる。原寸大ということになりますが、撮影はどのようにされたのでしょうか。

北野■撮影は東京造形大のスタジオでおこないました。周りに赤ちゃんが生まれたばかりの友人たちが何人かいたので、その子たちや、知り合いの伝手をたどってモデルにお願いしました。

赤ちゃんを寝かせることができるように、撮影スタジオに畳を敷いて、蒲団を敷きました。壁を作って撮影用の完全暗室を作り、印画紙を敷いて、その上に赤ちゃんののってもらいました。

真っ暗な中で、赤ちゃんを印画紙の上にのせてもらったのですが、親御さんが手を離れた瞬間に「ぎゃーっ」と大泣き。阿鼻叫喚でした(笑)。パシャってストロボを焚いて、抱き上げてください、と。



《P8》〈未来の他者〉より
2018年 発色現像方式印画 (フォトグラム)

— 何カ月くらいの月齢の赤ちゃんを、何人撮影したのでしょうか。

北野■2カ月から8カ月くらいの赤ちゃんを8人撮影しました。首が据わってハイハイするまでですね。最初は3人来てもらって、1人だけ、2人だけ、3人で、と撮影しました。2回目は5人来てもらいました。だから5人で写っている作品もあります。

— フォトグラムでは印画紙に光が当たった部分は真っ黒になります。北野さんは今回、フォトグラム作品をネガとして、それを反転させたポジ像もお作りになったんですね。

真っ黒な画面の中に 浮かび上がる沖縄のガマ

オサム・ジェームス・中川さんはニューヨーク市生まれ、東京育ち、そしてアメリカ・ヒューストンでアートと写真を学んだ写真家。現在は、インディアナ大学で教授を務めています。今回、展示する作品は沖縄の洞窟で撮影した〈ガマ〉。いったいどのような作品なのでしょう。

— 今回、展示される〈ガマ〉は沖縄の洞窟「ガマ」で撮影されたシリーズです。ガマは地元の人々の祖霊が眠る信仰の場であり、太平洋戦争の沖縄戦で大勢の人が避難し、集団自決に至った痛ましい歴史があります。中川さんの〈ガマ〉はどのように制作されたのでしょうか。

中川■沖縄に初めて行ったのは2001年。きっかけは妻が沖縄出身だったことです。行ってみてそこに僕がよく知っている1970年代のアメリカを発見しました。ただしそれは米軍基地のフェンスの向こうにあるんだけど。そして博物館で沖縄戦のドキュメンタリー・フィルムを見てその悲惨さにショックを受けました。しかもアメリカがやったことだ、と。

〈ガマ〉の前に、〈バンタ〉という作品をつくりました。太平洋戦争で米軍が海上から砲撃した崖を撮影したシリーズです。次に集団自決のことを知り、ガマで撮ろうと思ったのですが、お世話になっていた妻の親戚から大反対されたんです。

— それはなぜでしょうか。

中川■集団自決以前に、ガマは大昔から神聖な場所なんですね。スピリチュアルでパワフルな場所だから、撮影なんてとんでもない。それでも撮りたいと言ったら、ユタのところに行って、僕がガマを撮ってもいいかどうかを聞こうということになりました。ユタというのは沖縄の伝統的なシャーマンで、霊的な相談に乗ってくれる女性です。

ユタに会いに行くと「あなたは沖縄に呼ばれて来ている。ガマに必ず行くでしょう。それを世界中にリリースするでしょう」とあっさり許しがもらえたんですよ。

— 不思議な話ですね。〈ガマ〉は写真集にもなり、世界各地で展示され、文字通りリリースされています。ガマでの撮影はどのようにされたのでしょうか。

中川■アシスタントとガマに入り、三脚にカメラを据え、フォーカスや構図を決めて、カメラのシャッターを開けます。それから露光している間中、僕が懐中電灯を手に壁面を照らしていくのです。真っ暗なガマの中で、肉眼では見えないものに光を当てる。そこにいるかないかわからないけれど、いるような気がする、亡くなった人たち

北野■黒い背景に像が浮かんでいるイメージだけではなく、明るいところに赤ちゃんがいるところを見てみたかった。それに、反転させると色も転ぶので、色を変えることで違う発見があるかもしれないと期待しました。

やり方としては、フォトグラムの下に未露光の印画紙を置いて、上からストロボを発光させます。そのとき、ストロボの前にフィルターを入れて色をコントロールしています。フィルターを入れないと、茶色っぽいにごった色になる。僕なりのいちばんしっくりする色はどんな色かを考えながら、フィルターを変えていろいろなテストデータを作りました。結局、濃いグリーンを何枚も重ねて、赤ちゃんが淡いピンクになるようにしています。白地に赤という組み合わせがぴったりだったんです。

— 「イメージの洞窟：意識の源を探る」というテーマとの関連性で言えば、赤ちゃんのいる場所——お母さんのお腹の中——を身体の中の洞窟と考えることもできそうです。

北野■お母さんのお腹の中と、こちら側の世界。内と外のイメージを展示方法で表現できそうです。具体的には、暗めにして作品にだけ光を当てるネガ像の部屋と、その外側に、壁に赤の補色にあたる青を使った明るい空間を作り、サーモンピンク色の赤ちゃんのポジ像を展示するというものになりそうです。

— 洞窟というテーマについて、いま、思われていることを教えてください。

北野■洞窟は大昔から人間にインスピレーションを与えてきた場所だと思いますね。数万年前にラスコーやアルタミラのような洞窟壁画を描いた人たちがいたように。あの洞窟壁画を描いた人たちは、まさか数万年後の人類がその絵を見ることになるとは思っていなかったと思います。でも、僕たちはその絵を見ていろいろなことを考えることができる。写真もまた、そんなふうに彼方の他者とイメージの回路を結ぶことができるメディアだと思っています。

僕自身、いま生きている人たちだけでなく、時間的にも距離的にも遠く離れた他者を想定して、彼らに向けて表現していきたく思っているんです。芸術はそれくらいの遠いオーディエンスを想定したほうがいい。遠ければ遠いほど、多様な解釈の可能性が広がりますから。とくに今回は洞窟という抽象性の高いテーマの展覧会なので、作品をめぐるいろいろな話しができるんじゃないかと楽しみにしています。

や、神様に向かってシャッターを開けて「こっちに入っておいで」と呼びかける。それを何度もやって、撮影した写真をパソコン上でつなげて超高解像度の1枚の写真にします。見えないものを見ようとする努力の結果なんです。

— 露光時間が長いので写ってはいませんが、中川さん自身が動いて光を当てているんですね。実はすべての写真の中に中川さんがいる。〈ガマ〉には高解像度の作品のほかに、一見、真っ黒に見える作品〈闇〉もありますね。こちらはどのようにつくられたのですか。

中川■解像度が高くハイパーリアルな〈ガマ〉を、日本やアメリカで展示してみて、オーディエンスが見ているものと、僕が実際にガマの中にいた経験とちょっとズレがあるんじゃないかと感じるようになりました。

そんな時、ヒューストンでリチャード・セラの展覧会があって、彼のドローイング作品を見たんですよ。真っ黒の、とてつもなく大きい作品でした。それを見て、インスピレーションを受けたんです。真っ黒なんだけど、時間が経って目が慣れてくるとだんだん何かが見えてくる。これが洞窟にいる時の感覚だ、と思いました。

それからリチャード・セラをリサーチしたんですけど、すごくいいことを言っている。「ドローイングはいつもペインティングの下に隠れてる。僕はその隠れたドローイングを見せたい」。この言葉もヒントになりました。



《#036》〈ガマ：闇〉より 2015年
インクジェット・プリント

〈闇〉は、アワガミファクトリー（阿波和紙の企業組合）の楮二層紙（コウゾウニソウシ：インクジェット対応和紙の一種）にガマの写真をプリントし、その上に墨を吹き付けたり、紙の裏に墨を塗ったものです。

ハイパーリアルな〈ガマ〉では、紙にプリントしているのに本物の岩肌のように見えました。触ろうとしたオーディエンスがいたくらい。つまりこれは紙じゃないみたいだと思わせた。だったら逆に、今度は紙だってことを意識させよう。そこでアワガミを使うことにしました。

アワガミに出合ったのは、東京藝術大学でワークショップをやった時でした。学生たちとアワガミに写真をプリントしたんです。アワガミは濡らしてもインクが落ちず、水に強い。濡らしちゃおう、珈琲につけようって遊んでみました。たまたまその中に日本画専攻の学生がいて、いろいろな種類の墨を持ってきてくれた。水で濡らしたアワガミに墨を塗ると真っ黒になる。でもドライヤーで乾かすと下にあるイメージが浮かび上がってくる。これって暗室での作業に似ているなあ、と思ったんです。

〈闇〉は東京藝術大学大学美術館陳列館の「『写真』見えるもの／見えないもの #02」展（2015）で展示しました。今回はその時にできなかったことをやります。イメージがあるほうだけでなく、裏面もお見せします。学芸員の

丹羽さんの提案でプリントを吊すことにしたんです。僕にとっても初めての試みです。先日、展示の実験で初めて吊してみたんですが、後ろを見て、前を見て、という見方ができるのはすごく面白かった。裏から光を当ててみたら、意外なディテールが見えてきたりもしました。

— 真っ黒に見えますけど、実はその下には洞窟のイメージがあるんですね。じーっと見ているとゆっくりと見えてくる。

中川■写真って、パッと見て、ぜんぶ見えると思ってますよね？見て、わかった気がしちゃってるんじゃないですか。写真が危険なのはそこです。わからないものはダメだと思い込んで。でも、抽象画を見る時に「わからないからダメ」とは思わないでしょう。わからないまま見ているうちにいろんなものに見えてくる。それが楽しい。そう考えると、何かが見えてくる、「appear（現れる）」っていう経験をすることが、写真にはあまりないんですね。

でも、実は写真家は暗室で appear を経験しているんですよ。現像液の中の印画紙にイメージが浮かんでくるという瞬間を見て感動している。でも、できあがった写真を見る人たちはそれを見ることができない。墨が乾いてきた時にイメージがじわっと見えてきて、暗室だ！と思ったというのはこのことなんです。

暗室の中で写真家が見ていることを、作品として見せている人は誰もいないんじゃないかな。僕がやっているのはたぶんそれに近いことだと思います。それもデジタルでね。

— 最後にこの展覧会のテーマについてうかがいたいのですが、中川さんにとって洞窟とはどんなものでしょうか。

中川■洞窟は大昔から人間と深い関わりがありますよね。キリスト教もイスラム教も、仏教も神道も、みんな洞窟を聖地にしています。なぜかと考えると、明るいところから真っ暗闇に入って、何も見えなくなる。そういう状況の中で、頭の中でイメージを描くことを練習してきたからじゃないでしょうか。

僕自身、ガマに入ったことで、アーティストとして変わったのかもしれない。洞窟には光がないのに、そこで写真をつくらうと思うことが写真の原理に反しているし、アワガミにプリントしてその上に墨を塗ったのも、いままでも僕だったら思いつかなかったかもしれない。

〈闇〉は、黒の中に浮かび上がってくるものが見ている人によってそれぞれ違うと思います。見て、わかった、終わり、じゃない。自分だけのイメージが見つかると思いません。写真は見てパッとわかるものじゃない。写真はこういうものだ、という思い込みを裏切るような作品になったと思います。

（インタビュー・文＝タカザワケンジ）

出品作家略歴

北野謙

1968年東京生まれ。1993年より写真家として活動。2012年に文化庁新進芸術家海外研修員として、アメリカ・ロサンゼルスに1年間滞在。東京造形大学特任教授。

自己と他者の存在、自己と社会の関係について思考するプロジェクトを重ねて制作活動を続けてきた。〈溶游する都市〉シリーズ(1989-1997)では、長時間露光によって揺れ動く人や木々の残像を捉えた画像が、掴みどころのない社会や流動的な時間の表象として、強い印象を生み出し、広く注目を浴びた。〈our face〉(1999-)は、世界各地の文化、宗教、職業など、さまざまな背景をもつ人々の肖像を制作し、多数の像を重ねて露光することで1枚の写真に仕上げたシリーズ。薄くぼやけた輪郭の肖像は、個の集積でありながら、一点の肖像として立ち現れている。このシリーズは第27回東川賞新人作家賞、第14回岡本太郎現代芸術賞特別賞、第16回写真の会賞を受賞した。

志賀理江子

1980年愛知県生まれ。高校生の頃から写真制作を始める。東京工芸大学写真学科を経て、ロンドン芸術大学で学び、2004年に卒業。2007-2008年には文化庁新進芸術家海外研修でロンドンに滞在。2008年から宮城県名取市北釜へ移住。独自の緻密なフィールドワークを元に制作する作品群で、国際的な高い評価を得ている。『Lilly』(2007)と『CANARY』(2008)、2冊の写真集を評価されて2008年に第33回木村伊兵衛写真賞を受賞している。〈Lilly〉シリーズは、ロンドンの公営団地の人々取材した写真をアナログ加工し、身体とイメージの関係を探ろうとした作品群である。〈CANARY〉シリーズでは、仙台、オーストラリアのブリスベン、シンガポールなど遠く離れたそれぞれの土地で暮らす人々に「あなたにとっていちばん明るい場所、暗い場所はどこですか」と質問し、その回答の場所を実際に訪ね、感情と記憶のあり方を表現しようとした。東日本大震災で自身も被災しながら、同地での日々を撮影し続け、2012年に仙台メディアテークで個展〈螺旋海岸〉を開催。2018年に当館で開催した個展で新作〈ヒューマン・スプリング〉シリーズを発表。

フィオナ・タン

1966年インドネシア生まれ。中国系インドネシア人の父とオーストラリア人の母のもと、オーストラリアで育つ。オランダのヘリット・リートフェルト・アカデミー(美術大学)で映像を学び、最高峰のアート・イン・レジデンス施設である国立美術アカデミーでの制作を経て、アムステルダムを拠点に活動する。作家自身のアイデンティティを探るドキュメンタリー作品《興味深い時代を生きますように》(1997)で注目を集め、2009年のヴェネツィア・ビエンナーレでは、マルコ・ポーロ『東方見聞録』のナレーションを用いたフィクション作品《ディスオリエント》を発表した。ファウンド・フッターやインスタレーションを用いた作風で知られる。西洋と東洋や時間と記憶の関わりを再考する作品を多く制作している。

オサム・ジェームス・中川

1962年ニューヨーク市生まれ。1963年から1977年まで東京で育つ。1993年ヒューストン大学芸術学部にて修士課程修了(写真学)。2009年グッゲンハイム・フェローシップを受ける。現在、インディアナ大学ルース H. ホールズ特別教授、同大学総合写真研究センター長。1980年代より本格的に写真制作を始め、1986年から1988年にかけて東京に滞在し、小川隆之に師事。日本とアメリカにまたがるアイデンティティの葛藤を軸に、記憶、歴史、家族などをモチーフに制作活動を行っている。〈ドライブ・イン・シアター〉シリーズ(1992-1997)では、そのスクリーンに差別的デモや移住労働者の写真を映し、かつて抱いていたアメリカへの憧憬と現実社会の差異を表現した。2006年及び2009-2010年、妻の故郷である沖縄に滞在し、第二次世界大戦中の集団自決という歴史的背景のある〈ガマ〉のシリーズを制作。

ゲルハルト・リヒター

1932年ドレスデン生まれ。ケルン在住。ドイツを代表する現代美術家の一人。旧東ドイツで美術教育を受けた後、旧西ドイツの抽象表現主義に影響を受け、1961年、ベルリンの壁が祖国を分断する半年前に旧西ドイツのデュッセルドルフへ移住。50年以上にわたり、絵画や写真、ガラスを用いたインスタレーションなど多様な制作活動を展開している。1964年にミュンヘンで初の個展を開催。1972年の第36回ヴェネツィア・ビエンナーレ以降、多数の国際展に参加し、1997年には第47回ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞を受賞。同年、高松宮殿下記念世界文化賞も受賞している。2011年から2012年にかけては、テート・モダン（イギリス）、ポンピドゥー・センター（フランス）、旧国立美術館（ドイツ）で大規模な回顧展が巡回し、近年ではクイーンズランド州立美術館（オーストラリア）など世界各地で個展を開催し続けている。現在、美術史を語る上で最も重要な作家の一人として認識されている。リヒターは、初期からフォト・ペインティング****と呼ばれる独自の方法で写真を絵画作品に取り入れている。

****フォト・ペインティング

新聞や雑誌の写真、あるいは自分が撮影した写真をキャンバスに描き写し、画面全体をばかした独自の手法。

ジョン・ハーシェル

サー・ジョン・フレデリック・ウィリアム・ハーシェル准男爵（Sir John Frederick William Herschel, 1st Baronet, 1792-1871）は数学、化学、天文学、光学に長じたイングランドの博学者。はじめてフォトグラフィ（photography）という言葉で包括的に写真を定義し、独自の写真方式であるサイアノタイプ（青写真）も発明した。1816年頃からカメラ・ルシーダを利用したドローイングを制作し、友人のヘンリー・フォックス・タルボットにも紹介する。このことは、のちのタルボットによる世界初のネガ・ポジ方式による写真技法の発明にもつながっている。このドローイングにおけるカメラ・ルシーダの使い方や筆致の緻密さからは、実験と経験によって得られる「知」を重んじたハーシェルの姿勢が感じられる。

関連イベント

アーティストトーク

2019年10月1日(火) 14:00-16:00

北野謙×オサム・ジェームス・中川

会場：1階スタジオ 定員：50名 先着順 参加費：無料

※当日10:00より1階受付にて整理券を配布。番号順入場、自由席。

色彩ワークショップ

2019年10月5日(土) 14:00-17:30 ワークショップ

ファシリテーター：杉浦幸子（武蔵野美術大学 芸術文化学科教授）、講師：北野謙（出品作家）

2019年11月16日(土) 13:00-18:00 ビューイング（ワークショップ参加者のみ限定公開、時間内随時鑑賞可）

会場：1階スタジオ 対象：どなたでも

定員：8名 事前申込み制 応募多数の場合は抽選 参加費：3,000円

出品作品〈未来の他者〉を鑑賞しながら色彩について語り合い、実際にプリントで色を作るワークショップです。

音と見る洞窟

2019年10月5日(土) 18:15-20:15

出演：オサム・ジェームス・中川（出品作家）

音楽：フェデリコ・アゴスティーニ（ヴァイオリニスト、

元イ・ムジチ合奏団コンサートマスター）

会場：2階展示室 対象：中学生以上

定員：50名 事前申込み制 応募多数の場合は抽選

参加費：3,000円（展覧会チケットを含む）

*閉館後の特別イベントのため、本展のみの観覧となります。



オサム・ジェームス・中川 《#009》〈ガマ〉
より 2010年 インクジェット・プリント
東京都写真美術館蔵

[演奏者紹介] フェデリコ・アゴスティーニ（ヴァイオリニスト、元イ・ムジチ合奏団コンサート・マスター）

イタリア・トリエステ生まれ。6歳の頃から、祖父よりヴァイオリンの手ほどきを受ける。トリエステとベネチアの音楽院、さらにシエナのキジナ音楽院で学び、サルバトーレ・アッカルドや叔父のフランコ・グッリらに師事する。16歳でカルロ・ゼッキ指揮のもと、モーツァルトの協奏曲を弾いてデビュー。1986年から伝説的なイタリアの合奏団「イ・ムジチ合奏団」のコンサートマスターを務め、1987年からはローマ・フォーレピアノ五重奏団のメンバーとしても活躍する。現在、愛知県立芸術大学の客員教授、および洗足学園音楽大学の客員教授を務める。

北野謙〈未来の他者〉プロジェクト

2019年11月4日(月・振休) 10:30-14:30 共同制作

2019年11月16日(土) 13:00-18:00 ビューイング

（ワークショップ参加者のみ限定公開、時間内随時鑑賞可）

講師：北野謙（出品作家）

会場：1階スタジオ

対象：生後2~8ヶ月の乳児と保護者の2人1組

定員：10組 事前申込み制、応募多数の場合は抽選 参加費：無料

暗室で柔らかい場所に敷いた印画紙の上へ赤ちゃんにのってもらい、ストロボを発光させて輪郭を写し取るフォトグラムという手法で作品を共同制作します。



制作風景（参考図版）

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

2019年10月11日(金) 14:00-

2019年10月25日(金) 14:00-

2019年11月8日(金) 14:00-

2019年11月22日(金) 14:00-

会期中の第2・第4金曜日、14:00より担当学芸員による展示解説を行います。

ご参加の方は、展覧会チケット（当日有効）をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

手話通訳つきギャラリートーク

2019年11月22日(金) 14:00-15:00

ご参加の方は、展覧会チケット（当日有効）をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

* イベントの詳細はホームページでご確認ください。

* 事業はやむを得ない事情で変更することがございます。あらかじめご了承ください。

展覧会図録

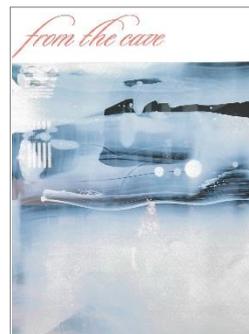
『イメージの洞窟：意識の源を探る』

本展の出品作品図版と、作家解説、出品リスト、学芸員によるテキストを収録。
和英バイリンガル、全 98 頁。

テキスト 丹羽晴美（東京都現代美術館学芸員、前・東京都写真美術館学芸員）

編集・発行 東京都写真美術館

価格：2,000 円（税抜）



開催概要

イメージの洞窟 意識の源を探る

from the cave

開催期間 2019年10月1日（火）－11月24日（日）

主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、東京新聞

協賛 凸版印刷株式会社、東京都写真美術館支援会員

協力 東京造形大学、有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー

会場 東京都写真美術館 2階展示室

開館時間 10:00－18:00（木・金は20:00まで）入館は閉館の30分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし10月14日〔月・祝〕および11月4日〔月・振休〕は開館、
10月15日〔火〕および11月5日〔火〕は休館）

観覧料 一般800（640）円／学生700（560）円／中高生・65歳以上600（480）円

※（ ）は20名以上の団体料金 ※小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料
※10月1日〔火・都民の日〕は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料 ※各種割引の併用はできません。

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、広報担当までご連絡ください。

* 図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

* 図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku, Tokyo, 153-0062

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 www.topmuseum.jp

展覧会企画者 丹羽晴美（東京都現代美術館学芸員、前・東京都写真美術館学芸員）

展覧会担当 山田裕理 y.yamada@topmuseum.jp

三井圭司 k.mitsui@topmuseum.jp / 伊藤貴弘 t.ito@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 岡田なつき press-info@topmuseum.jp

